

大学生の恋愛事情
—サークル内・外における交際要因の比較—

学籍番号 19051102 番 湯口若菜

指導教官 立木茂雄

2008年12月24日

要旨

大学生活は人との出会いが豊富で、その選択肢は個人によってさまざまである。自分の所属するコミュニティ内で恋愛関係に発展するケースも少なくないだろう。そこで、私自身の所属するサークル内での恋愛事情を思い浮かべてみると、サークル内恋愛をしたことがあるという人が大半だという事実気付いた。さまざまな出会いのきっかけがある中で、サークル内で恋愛をする人と外で作る人の違いにはどういった要因があるのだろうかということを分析するとともに、現代を生きる大学生の他者との交わりにおける相互意識について研究した。

次に、さまざまな学者の理論を基に、仮説としてサークル内恋愛に発展する要因を分析した。現代の恋愛に結びつく要因として、恋愛の理論研究におけるアイデンティティ保証の契機、感覚の類似、ジェンダーロールにおける性役割が挙げられ、この3点を軸に仮説を立てた。アイデンティティ保証の契機とは、社会の中で個人は多様化した選択肢に直面し、そこで個人が日々の決定を選択することによって、自己のアイデンティティは決定されていくことをいう。恋愛における個人の選択はアイデンティティを確立させる契機である。感覚の類似とは、現代の若者が自分と趣味や価値観、ノリなどが似ている点を異性の魅力として挙げていることからいえる。相手との摩擦がないほうが楽に付き合えるという現代の恋愛傾向である。ジェンダーロールとは男らしさ、女らしさといった伝統的性的役割を重視するか、という感覚の類似とは相反するものである。

サークル内恋愛をする人ほどサークル占有率が高く、感覚の類似を重視するという仮説を基にサークルに所属する5名の男女にインタビューを行った。仮説を基にした質問やサークルに関する質問も行った。これらの結果、サークル占有率が高く、そこでの帰属意識が高い人ほどサークル内恋愛をする傾向があり、サークル外で恋愛をする人ほどサークル占有率が低く、コミュニティや人に対する帰属意識も低いことがわかった。これは、大平(1995)が述べる現代若者の他者との関係と関連があるだろう。また、現代の若者に当てはまる傾向として、異性を選ぶポイントでは伝統的性役割と共に感覚の類似も重要視されているといえる。ジェンダーロールについては男性、女性ともに伝統的性役割の要素を持つ異性を理想の相手としながらも、感覚の類似を求めるといふ五人とも同じ結果だったので特にサークル内・外での交際要因には関係しないことがわかった。

1. はじめに

1.1 動機

1.2 サークルの説明

2. 先行研究

2.1 理論的研究における恋愛

2.2 恋愛に発展する際の要因

(1) 感覚の類似

(2) ジェンダーロール

2.3 仮説

3. 研究方法

3.1 調査概要

(1) 調査対象者

(2) 調査の手続き

4. 結果と分析

4.1 インタビューと分析

(1) Aさん

(2) Bさん

(3) Cさん

(4) Dさん

(5) Eくん

5. 考察

6. おわりに

参考文献

1. はじめに

1.1 動機

「大学4年間は人生の夏休みだ」誰もがよく耳にする台詞だが、当の大学生本人達には実感がないというのが正直なところだろう。そんな中、大学生といえばアルバイトにサークル、遊びが尽きない年頃だ。授業や受験に縛られていた高校を卒業し、自分のペースで生活ができる上、社会との接点も増えるため行動範囲が広がるのでまさに未知の世界といえる。こうした人間関係の広がりの中で社会性が構築され、恋愛関係に発展する男女も少なくないのではないか。むしろ大学生ほど自由に恋愛できる環境に恵まれているものはないと思われる。

恋愛といえば小説、テレビドラマ、漫画だけでなく、最近では恋愛バラエティ番組まで放送され高視聴率を得ている。昔から恋愛というものは人々の間に存在していたが、時代を経てそのスタイルも変化していることだろう。そこで身近に私の所属するサークル内での恋愛事情を思い浮かべた。男女問わず参加することができるサークルであり、部活ほど厳しい規則などもなく個人のペースで活動に参加できるためか、恋愛も十人十色という風に様々だ。恋愛をしている人の中にも相手がサークル内にいる人、大学の学部が同じだったりアルバイト先などサークルの外にいる人など様々である。しかし過去から振り返ると、私のサークルにはサークル内恋愛をしたことがあるという人が大半だという事実気付いた。

さまざまな出会いのきっかけがある中で、サークル内で恋愛をする人と外で作る人の違いにはどういった要因があるのだろうか。これらについて分析するとともに現代を生きる大学生の他者との交わりにおける相互意識について捉えていきたい。

1.2 サークルの説明

上記に述べた私の所属するサークルとは、同志社総合スポーツサークルジードという名の大学学友会登録団体であり、球技を中心としたオールラウンドスポーツを活動の中心と

するサークルである。2001 年度に創設された、まだ若いサークルだ。部活とは違い、スポーツが苦手でも楽しむことを大切にしたいという初代会長の熱い想いを引き継ぎ、男女問わず多くの学生が所属している。

サークル人数は現在121人であり、毎年新入生が100を超えるマンモスサークルだ。その分諸事情により辞めていく新入生も少なくない。それぞれの学年における人数は、大体2回生の幹部決めの際に固定人数になる。毎年その頃から活動に参加するメンバーが固定になるため、サークルを引っ張る2回生として学年内の結束も強くなり、仲も深まる傾向がある。そしてサークルとしてではなく、学年で旅行に行くなど交流を深め始めることもある。

活動はあくまで自由参加であり、平日に週2回のペースで体育館を中心に行われ、活動時間の前半は男女混合で行い、後半は男女別に行っている。活動の前半は男女、学年混合のランダムでチームを組み、バレーボールを行う。後半の男女別競技は人数により競技内容が異なる。

その他にも約2ヶ月に1度のペースでスポーツ大会やOB会、お花見や忘年会などの飲み会などイベントと呼ばれるものも開かれ、年に3度の合宿も行っている。また、毎年秋に大学内で行われている、スポーツフェスティバルという他のスポーツ団体と競うことができる大会にも参加するなど、ただ単に楽しければよいという活動ばかりではない点もある。しかし全ての活動、イベントは自由参加のため、飲み会などのイベントだけにしか参加しない人もいる。特に1回生の頃は学年内の人数も多いため、活動とイベント共に参加する人、飲み会しか参加しない人に分かれる傾向がある。

2. 先行研究

2.1 理論的研究における恋愛

学術的研究の中で恋愛はどのように語られてきたのだろう。『恋愛の社会学』を著した谷本奈穂はこう述べている。「さまざまな学者が恋愛における人間関係について語る中、ゲオルク・ジンメルは次のように述べている。われわれは、われわれの心の中に、われわれ自身の感情の中に、他人を求める。このように求めることが愛と呼ばれる。」(谷本 2008)

すなわち相手を欲すること、これが恋愛の根本にあるというのである。また、恋愛関係は

アイデンティティを保証する契機としても語られている。谷本は次に、アイデンティティと対人関係の関連についてこう述べている。

そもそも、E.H. エリクソンによれば、アイデンティティとは「いける斉一性と連続性との主観的感覚」である。そして、それは、従来の精神分析学に則れば「個人」の人格的成長に核心をもつものとされていた。だが、エリクソンは「対人関係」や「共同体」といった社会的側面にもアイデンティティの核心があると考えた。彼のこの考えは、いまでは広く支持されている。つまり、アイデンティティは「対人関係」と関わるものなのである(谷本 2008)。

次に、アイデンティティと「選択」の関連について谷本は、例えばギデンズは、モダニティにおいて個人の選択が重要であることを指摘している。すなわち、モダニティにおいて個人は多様化した選択肢に直面し、そのなかで個人が日々の決定を選択することによって、自己のアイデンティティは決定されていくという(谷本 2008)。こうして、アイデンティティが、「対人関係」および「選択」を重要な契機にもつとすれば、「どのような他者と親密な関係を結ぶか」という選択決定もアイデンティティに直接関わってくる問題になるはずである(谷本 2008)。

ここで再びエリクソンの議論に戻ってみよう。彼は「アイデンティティの感覚」を、人との関わりのなかで自分を見つめることだと考え、さらに、その「アイデンティティの感覚」を保証するような他者との融合を、「親密な関係」と捉えている。もちろん、恋愛関係は「親密な関係」の一つなので、恋愛関係のなかで人間のアイデンティティ感覚は確立していくことになる。だから、エリクソンも、青年の恋愛を「拡散した自己像を恋人に投射することにより、そしてそれが反射され、徐々に明確化されるのを見ることによって、自分のアイデンティティを定義づけようという一つの試み」と考えるのである。以上のことから、「恋愛」は、他者との関わりのなかでアイデンティティを保証していくものとして語られているといえる(谷本 2008)。

これらの議論から、理論的研究では、恋愛は、「他者を求めるプロセス」であり、「自己のアイデンティティを保証できる契機」として語られてきたとまとめることができる(谷本 2008)。

2.2 恋愛に発展する際の要因

恋愛において異性の魅力とは大いに交際のきっかけになりうる。さらに谷本による雑誌

記事とアンケートによる調査によると次のような結果になった。

男性の魅力	
1970年代	現代
<ul style="list-style-type: none"> ・女性をリードする ・スポーツマン ・会話が面白い ・自分を愛してくれる ・能力が高い 	<ul style="list-style-type: none"> ・感覚が類似していて気が合う ・女性をリードする ・スポーツマン ・能力が高い ・優しさ ・自分を愛してくれる ・会話が面白い ・清潔感 ・外見がいい ・経済力がある

図1 男性の魅力

女性の魅力	
1970年代	現代
<ul style="list-style-type: none"> ・外見がいい ・女性的美点 ・翻弄する女 	<ul style="list-style-type: none"> ・女性的美点 ・外見がいい ・感覚の類似 ・男性より下位に属する ・明るい ・女だけで群れない ・媚びない ・ミステリアス ・笑顔 ・知識が豊富

図2 女性の魅力

女性の欠点	
1970年代	現代
<ul style="list-style-type: none"> ・男性より優位に立とうとしている ・マナーがない ・極度潔癖症 	<ul style="list-style-type: none"> ・男性より優位に立とうとしている ・だらしない ・外見が悪い ・自分を美人だとうぬぼれている ・厚化粧・香水

図3 女性の欠点

図1と図2を見ると、男女ともの魅力として1970年代にはなかった「感覚が類似していて気が合う」「感覚の類似」が新たに増えている。また、図2の現代女性の魅力として増えている「男性より下位に属する」と、図3の1970年代と現代の両方にみられる「男性より優位に立とうとしている」は呼応していると考えられる。男性の欠点は、1970年代の資料がないため省略した。

(1) 感覚の類似

図1.2より、現代における男女の魅力に「感覚の類似」という共通の項目が挙げられている。これについて谷本は以下のように述べている。

実は、雑誌上では異性の魅力として、最もあがってきていたのは、伝統的性役割に沿った

特性ではなく、〈感覚〉〈趣味〉〈価値観〉〈フィーリング〉〈雰囲気〉〈ノリ〉〈話〉などが合うこと、あるいは〈友だち感覚の共有〉〈同級生感覚の共有〉であった。これらを一言でまとめてみれば「感覚的なものの類似」が最も重要な魅力の要素ということになるだろう(谷本 2008)。

人間関係では、異なる人間同士がその差異——肉体的・精神的——に惹かれるという側面がある。恋愛でも自分にはない個性に惹かれるというのはいくらもあることだ。しかし新しい傾向は、あえて相手に似たような感覚を求めるのである。対等な関係を基本とする友達感覚や同じ場所に居る仲間感覚が、恋人として重要な要素となるのである(谷本 2008)。

次のような記事に注目するとわかりやすいだろう。〈彼がスキー場でアルバイトしていた時にインストラクターをしていた彼女と出会ったのがきっかけ。共通の趣味を持つことが恋人候補になる近道だとか。毎年スキー旅行は欠かせません〉〈サークルがきっかけで付き合いだした二人。長い時間を一緒に過ごすことで、お互いの性格の共通点を見出せたことが、付き合いときの最大の決め手だったそう!〉このように、あくまで、感覚や趣味、あるいはノリといった感性に訴えるものの類似が大切なのであることは押さえておきたい(谷本 2008)。

しかしながら、感覚のような主観的条件が重要である場合は、恋愛が外の世界に対して開かれたものであるよりも、自己完結した世界となる。つまり、感覚や感性という主観的で個人的な条件を重要視することで、恋愛主体と外部世界との関連を断ち、恋愛を社会に対して閉ざしたものにしてしまう。わかりやすくいえば、世界は恋する二人だけのためにあればよく、二人だけで閉じこもった空間が生成するということである(谷本 2008)。

さらに、感覚が類似した者が自閉的關係を作るということは、コミュニケーションが容易にとれるということに帰結していく。場合によっては、恋愛は自分と異なる他者と深く結びつくことで、その差異から多くのことを学ぶ機会となるだろう。差異のためにコミュニケーションをとる困難を知る場、それでもなお他者と結びつく喜びを知る場、自分とは違う者とのコミュニケーションをとる訓練の場になるということだ。しかし、感覚の類似している人を恋人にすると、コミュニケーションが比較的スムーズだと予測され、よけいな摩擦もなければ、よけいなエネルギーを使う必要もない。わかりやすくいうと「楽しい恋愛が楽にできる」のである。したがって、「感覚の類似」が異性の魅力として重視されることは、外に開かれていない完結した世界の中で、似たもの同士が楽しい恋愛を繰り広げることが目指されているということを示している。つまり、社会という「外部」と摩擦を起こすこともなく、

また恋愛関係の「内部」でも摩擦を起こすこともなく、また恋愛関係の「内部」でも摩擦が最小限になるという関係性こそが「恋愛の形」として立ち現れているのである(谷本 2008).

(2) ジェンダーロール

表を見るとまず第一に、男性の魅力として、自分(女性)の知らないことを教えてくれること、女性を口説くのに強引であること、自分(女性)を成長させてくれる人であることなどの「女性をリードする」という属性があがっている(谷本 2008).

伝統的な男性の性役割(ジェンダーロール)が「指導力のある」「頼りがいのある」「たくましい」「頭がよい」など(「新性役割尺度の構成に関する研究」)であることから、「女性をリードする」「スポーツマン」「能力が高い」はそれらに近いステレオタイプな男性的魅力だといえるだろう. すなわち、第一に男としての魅力は、男性性役割に合致したものである. だが第二に、現代の言説では男らしさとは別の魅力も登場している. こちらの方が現代的だと思われるうえに、人気もより高いことから重要だろう. 魅力の一つとして、「感覚的なものが類似していて合う」という項目が最も多くあがっている(谷本 2008).

したがって、女性からみた男性の魅力は、伝統的ジェンダーロールに沿ったものが見受けられる一方で、両性の接近とも呼べるものが増えていることが特徴となる. 男性の魅力に関する言説は、相反する性意識が交じり合うものになっている(谷本 2008).

男性から見た女性の魅力は、伝統的役割にそったものになっている. 女性の魅力は、外見がいいこと、ステレオタイプな女性的美点と呼べるものを備えていること、男性よりも弱い存在であることなどである. この点について 1970 年代と現代の差はない. しかし、女性の魅力の新しい傾向として、男性の魅力と同じく、両性の接近とも呼べる特徴もあがってきている. それには特に感覚の類似があげられ、大きな魅力の要素になっているのである. 一方で庇護されるべき女性像を求めながら、もう一方で対等性を要求する友達感覚も求められるような一見矛盾した結果になっている(谷本 2008).

2.3 仮説

現代の恋愛に結びつく要因として、恋愛の理論研究におけるアイデンティティ保証の契機、感覚の類似、ジェンダーロールにおける性役割、この3点を軸に仮説を立てた. 自分の中のサークル占有率が高い人ほど、サークル内でアイデンティティが形成されると考えられる. そうなると自然とそういった人ほど、サークル内での恋愛をするのではないか. 逆に、

サークル以外のコミュニティに活動の重点を置いてきた人は、サークル内を恋愛の場としてみていないのだろうか。異性の友人と思っている相手でも恋愛対象になるという人は、自分と感覚が似ている人が理想の相手なのだろうか。サークルでの四年間は友人関係を育むのに十分な時間だが、その中で共通性を見出せたならばサークル内での交際に結びつくのだろうか。また、サークルという小さなコミュニティの中で他人の目を気にする人は、二人だけの自閉的空間を避けようとするためサークル内での恋愛を避け、外で作ろうとするのではないか。男性、女性ともに伝統的性役割の要素を持つ異性を理想の相手としながらも、感覚の類似を求めるのだろうか。一つの小さなコミュニティ内で恋愛をするか、決してその中は恋愛の領域に入らないのかを、これらの仮説をもとに検証していきたい。

3. 研究方法

3.1 調査概要

(1) 調査対象者

仮説を実証するために5名の22～23歳の男女に1人約1時間インタビューを行った。対象者は、サークルに所属する4回生を対象とした。他の回生よりも群を抜いてサークル内恋愛の数が多く、サークル所属歴も長い4回生を対象とすることで、4年間の活動を通してのサークルと恋愛の関わり合いを見ることができると考えるためである。

また、サークルに入る1回生が四月の時点で100人を超える大人数になるというのは、私たち4回生のサークル加入の年から始まったことである。その中で4回生現在までサークルに参加し続けているということはサークルに何らかの帰属意識があり、アイデンティティを実感できる空間なのだろう。その中で原則として、サークル内・外それぞれで一度でも付き合った経験があり、その交際以外に同時進行した交際を行っておらず、遠距離恋愛ではないことを調査対象者の条件とした。

(2) 調査の手続き

上記の仮説より、いくつか質問項目を用意しインタビューを行った。まず、大学に入って異性と交際した人数、その出会いのきっかけなど基本事項を尋ねた。アイデンティティ保証の契機、感覚の類似、ジェンダーロールにおける性役割を軸とし、自分の中のサークルの位

置はどのあたりか、恋愛をすると自分は変わるか、自分にとって理想の相手とは、サークル内恋愛をしているカップルを見てどう感じるか、実際サークル内恋愛の経験がある人は周囲の目を気にしながら交際していたか、交際相手との類似点などを聞き出した。

こうした質問項目のほかにもサークルに関する基本的な質問も行った。サークルに入っただけのきっかけや参加するイベントの種類、自分にとってのサークルの占有率を聞き、その他のコミュニティと比較してもらった。

4. 結果と分析

質問項目ごとにインタビュー内容を振り分けたものが次の表 1 である。これをもとに、1人ずつインタビュー内容を振り返りながら分析していきたい。

表 1

	A	B	C	D	E
人数	4	3	1	1	3
②出会ったきっかけ	高校、サークル、知り合い、アルバイト	学部の友だち、友だちの先輩、サークル	コンパ	バイト繋がりで知り合い	高校、サークル、アルバイト
③近くで付き合いたい？少し離れたところがいい？	近くは嫌だけど、好きになったら仕方ない。クラスとサークルは規模がまた別だと考える	紹介やメールはうまくいかない。面倒くさい。	近くは嫌。恥ずかしい。けど自分が気になって相手に言われたら付き合い合う。	特に気にしない。	近くがいい。友達の延長で付き合い合うことが多いから。周りの目は気にしないし。
④恋愛をすると自分は変わる？	自分自身はメイクも服装も変わらない。相手に対してはメールや記念日を大事にしたりするが。	時間的なペースを相手に合わせてしまう。友達と会う時間が減る。	気持ちがばれるのが恥ずかしいからそれを隠すために見栄を張ってしまう。	相手のペースにかなり合わせてしまう。いる時に比べて異性をあまり意識しなくなるなど異性に対しての意識も大分変わる。	自分自身は代わらない。友達との付き合い時間が減りその分恋人に費やすようになる。
⑤なぜその人と付き合い合ったか？	初めは友達だったが気が合うところがあったからなんとなく。	一番仲もよかったし、断ってその後の関係を崩したくなかった。気も合うしとりあえず付き合い合ってみることに。	話していて面白かったから。	自分と似ている何かを感じたから	お互いの友達同士でよく遊ぶようになってなぜか惹かれていった。学部も同じで顔を合わす機会も多かった。
⑥サークルに入ったきっかけ	スポーツがしかった。男女問わず友達を作れたかった。	友達作り。バレーがしたかったが、バレーサークルは怖そうだったから。	友達作り。スポーツが好きだから。	ユニフォームのデザイン。友達作り。サークルに入るものだと思っていたから。	友達作り。サッカーに入りたかったがきつそうだった。時期的に他のサークルに入り損ね
⑦参加するイベントの種類	1回生のときは活動と打ち上げ。2年生から全体的に参加するように。	2回生の冬頃から全体的に参加するように。それまでは他で遊んでいた。	1回の頃からイベントに関わらず参加したりしなかったり。バイトや地元のバスケなどの予定に合わせて行ける時は行く。	1回生夏までは夜中も先輩と遊ぶほどだったが、夏合宿に行かなかったためその後参加しづらくなる。2回生初めは参加していたが夏前にアルバイトを始め、また参加しないようになる。	1回生新歓の頃からほとんど全ての活動・イベントに参加。
⑧サークル内で付き合い合っていて周りの目を気にする(と思う)？	気にしなかった。サークル内で一緒にいることがなかったため。	あまり活動などで一緒にいることがなく、恋人の性格を皆がわかっているため気にしない。		初めは自慢するが、周囲に対して気を遣わせないように気をつける。	イチャつくこともないので冷やかされるくらいは気にしない。いつまでも照れるよりは周りの雰囲気盛り上げるような方向に話を持っていくほうが楽。好きなら気にしない。
⑨サークル内で付き合い合っている人を見てどう思う？(当事者に対して気を遣うかなど)	ややこしい面倒くさいしうとおしい。相手によるが、付き合い合っている時や別れた後は気を遣うと思うから。	付き合い前はやきもちなどがあるから面倒くさそうに見えていた。サークルは友達同士でワイワイする場なのにそういう人がいると雰囲気を乱すから。	あ～付き合い合ってるわ。まあいいんじゃないか。と思うくらい。	異性の恋人と話さないようにしないとまでは思わなかったが、邪魔しないようにしようと思った。	相手によるかもしれないが、男は嫉妬をしないだろうから女の子の場合だけだと思う。
⑩サークル内の異性をどういう目で見ています？(サークル内恋愛していない人のみ)			1, 2回生の時は外に好きな人がいたから何も思っていなかった。自分の中で友達はないと決めているしきっかけもタイミングも今更ない。	友達としていいところはあるが、恋愛対象には見ていない。もう友達だから。	
⑪サークルの友達とその他の友達の雰囲気の違い	サークルは皆で集まると盛り上がるが個々だとふらふらしている。サークル以外にがんばっていることがあまり見えず、逆に学校の友達はそれぞれの夢に向かって努力する子が	サークルは優しい感じ。それぞれ雰囲気が違うが特に居心地がよかったですりなど特徴はわからない。	サークルは少しみんなで寄りたがる感じ。地元やバスケは仲間って感じでそこまで寄りたがるほどではない。	学校はサークルも学部も同じ。自分がアバレルでバイトしているのだから見られるのが嫌。バイト先は年上も多いし少し違う。	自分のキャラが違う。サークルでは一番出せるがゼミやバイトではおとなしくなる。

⑫理想のタイプ	少し引っ張ってくれて流されないような男らしい人。	考え方が一本筋通っている人。お茶目で面白い人。	芯があり自分の夢に突き進むような人。自分のことはこの次でいい。自分は後ろで見ておきたい。フィーリングなど直感で恋に落ちる。	同じ話題を共有したり、学校で一緒にいられなくてもいい。元々人をマイナスから見るので第一印象からプラスで見られる人。自分と同じように気を遣える人。	内助の功のような人。結局は自分が手玉にとられていいから、褒めてくれて家庭的な人がいい。
⑬自分にとってサークルの位置	1回の時はまあまあ。2回でバイトに力を入れだし辞めるか迷った時期も。3回から個人的に仲良くなるようになり今では自分の中で大きい	1, 2回はあまりだが3回から参加だし、まあまあ位置に。恋人が同じサークルなので付き合ってから少し位置が上がった。	バスケや地元とおなじくらい。	サークル自体は低いがバイト、恋愛、友達の友達の友達に入る。	大学生生活＝サークル先輩も友達も楽しかったし。
⑭グループに対する帰属意識など	あまり一つの場所にいることが好きでない。ずっと同じグループにいると視野が狭くなる。結局安心する場所は家族だから。	特に依存はしないと思うが、エスカレーター式だったため、就職を機に友人と離れるのがこの上なく辛い	属しすぎると自分がしんどくなるのであまりサークルにも行かないようにしていたことも。適当にいるんな子と遊ぶほうが楽で楽しい。	依存はしない。誰に対しても面倒なので約束というものをしないようにしている。普段友達に合わせることはばかりでいいように使われることも多いので、その反動。自分で壁を作ってしまったのかも。	
⑮今でもサークル内の異性を恋愛対象に見れる？	見れない。もう中身を知ってしまい異性としての魅力が見えないから。	見えない。自分の恋人の友人だから。	見えない。もう自分が友達だと思い込んでいるから。	今更女の子らしくできないし、その中で自分のキャラが出来上がってるから無理だと思う。	
⑯サークル内の異性に対する現在の意識	芯が無く、自分を持っていないため一人で行動できる人がいないようにみえる。陰で文句を言うなら表ではっきり意見を言うて欲しい。	彼氏の友達	まじ友達感覚	年下や同い年には全く興味ないのでただの友達	
⑰なぜサークル内の異性を恋愛対象としてみないか	もう中身を知ってしまい異性としての魅力が見えないから。	彼氏の友達だから	自分は人からの見られ方を気にするし、プライドが高いから。自分を引っ張ってってくれるような人がいないから。	サークルや学校は友達の輪っかって感じがするから。外は1対1の繋がりがもてる機会が多い。	特にみていないわけではないが、前の彼女が気にしてなければいい。
⑱恋愛と結婚		繋がっているとは思いますが違う気がする。結婚の方が現実的なので簡単に口にしたくない			繋がっている。結婚できないと思うような相手とは付き合わないし別れてきた。
⑲相手と似ているところ	考えてることが似ている。みんなの前でこう言うけど本当はこうだったでしょ？て聞いたらそうだったとか、共通の友達にも似ているとよくいわれる。似たもの同士だからうまくいかないこともあった。お互い恋愛においてはメールや電話など自分の気分で行動することが多い。	食の好みも趣味も全く違って同じところが本当にない。互いに気持ちの浮き沈みがあるので理解できる場所もある。だが波長は付き合う前から合っていたと思う。	適当な感じが似ているけど、他は特に似ていない。	あまり人に心を開かないところ。	

表 1

4.1 インタビューと分析

(1) Aさん

彼女は、大学在学中に 4 人の異性と交際経験がある。一人目は中学の同級生、二人目は同

じサークルで同学年の友人, 三人目は友人の知り合い, 四人目はアルバイトがきっかけで交際したようだ. さまざまなきっかけでの交際経験がある. 彼女がサークル内で交際した期間は約半年である. 彼女にとってサークルの占有率とはどのくらいのものなのかに焦点を当ててみたい. 最初に, Aさんは恋人との距離について次のように話している.

「(恋人との距離が)近くは嫌だけど、好きになったら仕方くない？高校のときもクラスと一緒に、別れてからも3年間(クラスが)一緒だったから。高1で付き合ってた高1で別れて、その後高2ぐらいのときに(相手が)同じクラスの人と付き合いだして、私の友達にも告白してたし、だからあまり近くは嫌だなんて思ったけど、結局サークルでも付き合っちゃったし。」

彼女は高校生の時だが, 以前にも同じクラスの中という一つの空間の中で交際経験があったようだ. 別れた後, 相手が自分の友人と交際を始めたため, 自分の所属するコミュニティでの恋愛は今後あまりしたくないという感想を述べている.

ではなぜ大学に入り, 同じサークル内というコミュニティで交際を始めたのか聞いてみた.

「全然そういうの(サークル内で付き合うのは嫌だとか)考えてなかった。二度と～とか、絶対同じサークルでは付き合いたくないとかそこまでは思ってなかった。多分、クラスとサークルとは違うから。高校のときは同じクラスは嫌だなんて思ってたけどサークルは違うから。」

毎日顔をあわせる学校のクラスとは違い, 参加が自由で縛られた雰囲気のない大学のサークルは, 周囲の目や自分の意識的にも開けた空間なのだろう.

では, 実際にAさんのサークル内での交際は, どのようなものだったのだろうか. サークル内での交際について周囲の友人の目は気にならなかったのか, Aさんにとってサークルと彼氏の位置について聞いた.

「(交際が)サークル内ってことについて？別に抵抗はなかったよ。サークル内だからみたいなのは。」「何でだろうね～そんなにサークルが一緒ってことに関して、あんまり意識

したことはなかった。(交際する前の自分の意識としては)サークルで彼氏を作るとかそういうんじゃないで、たまたま(彼氏と)出会った場所がサークルだったって感じかな。」「そういう(飲み会の)時は、たまたまサークルが一緒だけど、そういう中では(彼氏とは)一緒にいるところじゃない。そういう、恋愛とかをする場じゃないからサークルは。」「付き合いだしたら、別に二人の時間は二人の時間があるから、ちゃんとその時間があるってことで、普段遊べない、合えない友だちに逆に会えるからそっちの時間の方が(サークル中に彼氏と話すより)大切かなって思う。」

彼女はサークル内で交際していたが、サークルと彼氏を自分の中で混同させないように別の物として付き合いっていたようだ。その背景には、逆にサークル内恋愛をしている友人を見て感じたことが大きく関係していると考えられるので、以下にそれを見ていきたい。

「もし今まで誰とも付き合いなくて、周りの4回生の(付き合いしてるのを)を見てたら、うっとおしいし、ややこしそうやし、絶対サークルなんかだからやめとけばいいのになって思ってたと思うけど。」「近いから、どうしても別れた後とかもすっきりしてない感じがする。そんなすぐにみんな友達に戻ってる感じもしないし、いい関係にはなれてないなと思う。普通別れたら別に会わないでいいのに、(サークル内だと)嫌でも顔合わせるし、別れた後どっちかが引きずってるような感じがするから。」「自分は違う(引きずったりしてない)けど、周りを見ててそう思うから。周りも(引きずったりしている子に)少なからず気を遣ってしまうから多少。」

彼女の言う、「気を遣ってしまう」というのは、Bさんも同様のことを述べている。

「話を聞いて、その、何かやきもち的なものが大変そうと思って。やっぱサークルってみんなでわいわいしたいなっていうのがあったから、そんな一人そういう(やきもち焼いて友達間の空気を乱すような)人が居たらみんなも気遣うやろし嫌やなと思って絶対ないと思ってた多分。」「付き合いってから別に分かるとかは思わんけどな～多分。」「あんまり(彼氏と)同じ場面におらんからな、(サークルの)活動おいても。でも(彼氏と)一緒におもしろいことはしたい。みんなでわいわいは一緒にしたい。」

Aさん,Bさんにとってサークルとはあくまで友人とのコミュニケーションの場であるようだ.交際相手を探す場としてサークルに参加しているのではなく,大学生活の中で友人との思い出作りの場なのだろう.Aさんのサークルに入った目的は,

「んー何かスポーツしたかったから。」「目的は別に～でもいろんな子と友だちになりたいみたいなのはあった。男女問わず。」

こう答えている.一度サークル内で恋愛をしているが,では,四年経った今でもサークル内の異性を恋愛対象としてみる事が出来るのだろうか.

「男?あいつらは、男らは自分ていうのがないやつらが多い?芯がない人が。結局なんか・・・サークルでも固まってるし、一人で行動すればいいのになって思う。あと、(みんなの前では)あんまり自分の意見はっきり言わないくせに、陰で結構言ったりしてるから、そういうのが私あまり好きじゃないかな。言いたいことがあるならばはっきり言えばいいのに。で、まわりでは「うんうん、みんなに合わせるよ」って言いながら、結局決まったことに対して文句言ったりするやん男って?」「良く知ってる(仲のいい)四回とかに関しては～恋愛対象になる人はいないね。魅力って思える人がおらんからかな?」

四年間培った友人関係の末,異性の良いところも悪いところも見えてしまったようだ.Aさんがサークル内で交際を始めたのは1回生の秋だ.

「Yと初め仲良くて、向こうもYと仲よかったから三人で仲良くなって、お互い似てるとこあったし気になってたみたいで付き合いだした～」

ようやく友達も出来始めた頃,お互いの共通の性格に気づいたのがきっかけで交際が始まったようだ.4年経った現在では異性に対してというより,異性の友人に対する不満が出るほど異性を友人としか感じていないようだ.サークル内での交際中も,サークルと恋人を切り離して考えていたようなので,彼女はサークルでは男女問わず友人を作り,恋人とはあくまで偶然サークルという場を介して出会ったのであって,付き合いきっかけになった場ではないと考えている.では現在彼女の理想の相手とはどういう人なのだろう

う.

「まず絶対自分は自分って思ってるところがあって、一人で行動できる、一人で買い物行ったりとかちゃんとできるのもそうやし、流されない男らしい人?」「あ~ちょっと引っ張ってってくれる人のがいい!そういう感じの人がおらんやん(サークル内の)4回生の男って。」

サークルの異性を恋愛対象としてみなくなった今,彼らの逆のタイプが彼女の理想になっている.自分と感覚が似ていることよりも伝統的な性役割として男らしさが挙げられている.

また,Aさんにとってのサークルとはどういう存在なのだろうか.彼女はサークルの友人とその他の友人の違いについてこう述べている.

「今思ったのは学科の友だちってのは属するものにとらわれなくて、自分のやりたいことをやってる子が多いな結構。一人でジム通ってたりとか、一人でラオス行く(ボランティア)のに参加したりとか、英会話やってることか、結構一人で行動しようって子が多い。」「みんなサークルの子は一人でこれをしてるとかいうのが皆バイトとかで、だからその分皆で集まったときの結束力は強いけど結局なんか自分は何がしたいこととか自分を持ってない子が多い気がする。今ぱっと思った。自分も含めてだけど。一人で行動できない子が多いかな。」

と述べている.彼女にとってサークルの友人は気は合うが,互いに刺激しあって個々を高める存在ではなさそうだ.彼女にとって自分の所属するグループとは何なのか聞いてみた.

「あんまグループにそんな依存せんかな。」「わからんけど自由に生きたいから?自由に生きるっていうかあんま縛られるっていうことにすっごい抵抗したくなるタイプやから.常に(友達と)一緒に何しようこうしよう何しようっていうのは、なんか優先第一じゃないとっていうのは、あんまり好きじゃない。」「結局安心するんて家族じゃん?だから確かに高校の友だちとかと一緒にいたら安心とかもするし中高の友だちとかも(安心)するけど、それはその場その場で、全然同じ安心する(のと同じだ)から。ずっと同じグループでいる

とほんとは視野が狭くなるような気がする。」

彼女は自分の所属するそれぞれのグループについて特に優先順位をつけるわけでもなく、依存しているという意識もない。自分が中心にいて、周りにあるそれぞれのグループに参加するという形だ。特にサークルにこだわらず大学生活を送ってきた彼女は、さまざまな場であまり自分なりにアイデンティティを形成し、恋人を意識する場もさまざまな場だったのだろう。

(2) Bさん

彼女は、大学在学中に3人の異性と交際経験がある。一人目は学部の友人、二人目は友人の先輩、三人目は同じサークルで同学年の友人だ。彼女もまた、サークル内恋愛を経験している。その期間は約2年であり、現在も進行中だ。彼女はサークル内恋愛をするまでの2年間、根拠もなしに自分は決してサークル内で恋愛をしないものだと考えていたという。その点に焦点を当ててみていきたい。

(1)のAさんの部分でも述べたように、Bさんはサークル内恋愛をする前はサークル内恋愛を「大変そう」とか「絶対自分はしないと思っていた」と述べている。サークル内恋愛をする前と後では何か違う点があるのだろうか。彼女は今の恋人と交際をするきっかけについてこう述べている。

「大学では～仲良くなって、こっちは友だちやと思ってるねんけど、向こうは実は違った的な。で告白されて驚いたとかが多い。」「だから別に、今の人は最初嫌いじゃないねん、仲良かったし、一番なんかサークルの中で良かったから、サークルの中で仲もよかったし、嫌いじゃないからー、で、全然普通に友だちやと思ってて、ちょうどそのとき(自分が)前の彼氏を引きずる的なのがあって、で、そんな時に友だちサークルの子から「(向こうが自分のこと好き)らしいで」と。いうのをいわれて、ほしたらなんか(相手)を意識するやん？で、しかも別れたとこやし、ていうタイミングもあり、別に、告白されたときも別に、嫌いじゃないし、もしこれを断ったら、正直な話断ったら今まで仲良かったのにそんなじゃなくなっても嫌やなあと思って、嫌いじゃないけど、まあまあそういう気持ちもちゃん

と(付き合う前に相手に)言って、「いいよ」って言ってくれたから、まあじゃあ付き合ってみよかみたいな感じに。で付き合って、でそしたら(自分が)好きになった的な。」

彼女の大学での恋愛は、友達の延長で始まることが多いようだ。では何がきっかけで今の恋人のことを深く好きになったのだろうか。今までの恋愛と違う点は何なのだろうか。サークル内恋愛に踏み込もうと思ったきっかけについて聞いてみた。

「優しい、優しいというか面白かったし。何か前の方が年上でめっちゃ優しすぎて私は甘えてしまってそれに、めっちゃわがままになっとなって、それが嫌、自分が嫌で。で、次同年代の同い年の子(今の彼氏)と付き合って、そしたらやっぱり気遣うっていうか、ちゃんとしんなんな〜って思って、甘えてばっかでもあかんしみたいな。それで、うまいこといけたと思う。・・・やっぱ、ある程度気遣うとかそういうの必要やなと思ってるねん。」

サークル内でのコミュニケーションの蓄積により、相手の性格知っていたが、交際することでより相手の良さを実感したようだ。また、以前の恋愛の反省を活かし、今の恋愛では気遣いができるようになることで自分自身も変化している。彼女は今の恋人と交際することによってアイデンティティもしっかり確立できているといえる。では二人は性格に共通する部分が多いのだろうか。

「似てるとこ？え〜〜似てるとこ〜？・・・？趣味も、食の好みも全っ然違うねん！」「向こうは、本とか〜本めっちゃ読んでんねんやんか。もう図書館並みに本あって。

ほんでTVみたりDVDみたり、本読んだり、そういうのが好きなんやん。好きなんやと思うねん。まあ私もそういう時もあるけど、大概私は遊びに出たりとかどっかいたりとかご飯食べに行ったりとかしたいねんけど、そこはちょっと違うんやんか。全然そこは違う。」「おんなじとこっていったら、その一まあ激しさは違うけど、浮き沈みがあるところかな。あと話してて面白い。ツボが合うっていうか。ただ、お互い違うところがありすぎるっていう話ばかり。ほんまに違うと思う。」

趣味も性格も正反対のように見えるBさんたちだが、唯一合うところは波長のようだ。これはサークル内で築かれた感覚の類似といえる。友人関係のときから、この波長の合致に

気づき、交際が始まってからも生活スタイルは逆であるがノリが合うためうまくいっているという部分があるのだろう。彼女がサークルに参加したのは2回生の秋だ。彼女の異性関係と共に変化するサークルでの友人関係の変化についてみていこう。

「二回の春ぐらいから前の彼氏と仲良くなりだして、で全然（サークル）いかへんかって、そっち（彼氏と）のほうが楽しくなってしまったから、で、別れて秋ぐらいになって、夏か、夏ぐらいかな。でサークルに・・・」「それまでは、別にサークルの子とはそこまで仲良くはなかったかな～、男子は多分Kとかみんなは、（今の彼氏と）付き合ってから（仲良くなりだしたん）やと思う。みんな（今の彼氏と）仲いいやん？で私のイメージがすごくなんかお高い人みたいな感じになってたらしくて、で、付き合って、「ちゃうやん」みたいな。」

サークルに参加しだし、今の恋人と交際を始めることがきっかけで異性の友人とも仲良くなったようだ。

Bさんは今の恋人と感覚が類似している部分もあるが、似ていない部分も多い。谷本(2008)によると、「恋愛は自分と異なる他者と深く結びつくことで、その差異から多くのことを学ぶ機会となるだろう。差異のためにコミュニケーションをとる困難を知る場、それでもなお他者と結びつく喜びを知る場」だという。その中でうまくアイデンティティも確立しているのだ。

(3) Cさん

彼女は、サークル内恋愛を一度も経験していない。大学中の交際人数は1人だが、大学の外での恋愛だ。この点について焦点を当てるとともに、彼女の友人やグループに対する意識についてもみていきたい。

サークル内で恋愛が全くないCさんだが、彼女はどのような異性が好みなのだろう。理想のタイプを聞いてみた。

「ほんまにうちその前の彼氏のことずっと好きやったから。わからんけど何か理想やっ

てんあの人はずっと。」「年上好きやなあ。何かその人がほんまになあ、自分の理想になっちゃってんやんかあ。何かその人の枠超えられへん。大学で一回付き合ったけどすぐ別れたし。」

「理想は～・・・何か、芯、芯のある人って言ったらおかしいけど、みんなそんな言うけど、何ていうのかな、自分のこと思い突き進んでいくような人好きやねん。別に私のことかまってくれんくてもいい。ねんけど、自分の思うことちゃんとやってくれたらいい。私はどっちか言うと何かこう、(彼氏と)おったらちょこんと(横に)ついてる感じ。自分のやりたいことをちゃんとやって、自分の夢に突き進んでて何か別にそんな私のことで予定合わせたり、お前があれやからって言ってそんなん言って思ってくれる人は好きじゃない。」

高校のときに交際していた恋人を長く引きずっているため、その相手がCさんの理想に近づいているようだ。感覚が似ているような相手というよりは、伝統的性役割を持つ異性に惹かれているのだろう。大学生活4年間に会った異性にCさんの理想に近い人はいなかったのだろうか。

身近な存在にいる、サークル内の異性で恋愛対象になる人はいるのか聞いてみた。

「おらんな～。サークルの連中なんて特にそうやもん何も思わなかったもんなあ～。(サークルの子と)1・2年の出会った当初なんてまじその人のことずっと好きやったもんな～でもコンパとかはめっちゃ行ってたけどな。そゆところとは別。笑」「(サークルの異性との恋愛は)もうないって自分の中で決めてるからかな？だって今更友だちからそういう風になるっていうきっかけもないし。タイミングもすべてもない。」

彼女の中で、1・2回生の頃は以前の恋人のことを引きずっていたため、サークル内の異性は友人にしか見えていなかったようだ。その延長で、現在もサークル内は皆友達と彼女の中で決めてしまっている。では彼女にとって、サークル内恋愛をしている人はどう映っているのだろうか。また、もしサークル内で交際したら、という可能性について話してみた。

「ああ付き合ってるわ、ははは～みたいな。しか思えへんけどいいんちゃう？って思う。」

「え～でもサークルはな～正直な～あんまりな～あんま近すぎたら嫌なタイプやから。恥ずかしがり屋やねん。」「だってさ、例えば私がY(異性の友人)大好きゆてるやんか？ま

あ A(同姓の友人でYと以前交際していた子)のことだってあるやん？それで今私がYと付き合ったりしたらおかしいやろ？」「でも変やん。何か、嫌やねんそういうの。ただそれだけ。肩書き、私プライド高いと思うで。プライド？人からの見られ方。で、気にするやんよく？気にしてるやん？」

他人が恋愛する分には不快な様子は全くないが、いざ自分がサークル内で恋愛するかもしれないという可能性を考えると、その可能性を全否定する。恥ずかしがり屋という言葉に置き換えているが、それ以上に彼女の中で肩書きやプライド、周りからの見られ方を気にするという部分がひっかかっているのだろう。やはり周囲の目を気にするあまり、サークル内で恋愛することで皆の中に二人だけの空間が出来てしまうことを避けたいのだろうか。彼女にとって自分の所属するグループに対する意識を聞いた。

「私性格的に、私所属しすぎるとしんどいから嫌やねん。あまりにも所属しすぎると自分が面倒くさくなったりしんどくなるから、あんまりそこまで所属せんから、そういう人やねん。適当に裏で遊んでるぐらいの。でも私正直サークルとかあんまり行きすぎへんようにしてる。あんまり行き過ぎたら面倒くさくなるし、その話とかについていかなあかんかったりするのも面倒くさいし。」「でもバスケ行ってるやん私？そこもそんな仲間みたいになってるけど、そこまでそんなガチガチじゃないし。ていうかサークルが特に何か(友達同士で)寄りたがるからかな？しんどいと思うの。何かそのバスケとか高校の連れとか、その辺は別にそんな会えんくても、それぞれが(高校などその友達同士で所属していたものを)卒業しちゃってるから。そりゃ高校のときはそこしかなかったから仲良くなるけど、大学とか入って社会人になったらそれぞれのさ、所属するともまた別になってくるやん？だから別に(高校やバスケの友達は)何も思わへんし。」

高校やバスケでの友人との繋がり具合が、彼女にとってちょうどよい関係なのだ。Aさんと同様に、一つのコミュニティに所属しすぎるのではなく、それまでに培われてきたアイデンティティを持ちながら、現在の友人関係をうまく成り立たせている。そのため、一度友人とってしまった相手は恋愛対象になりにくいようだ。表1からもわかるように、彼女の中のサークル占有率は他と同じだ。恋愛をする場所もサークルや、それまでに所属していた高校にこだわるのではなく、コンパに進んで参加するなど、新しい出会いを日々求める中、

直感で見つけるのだろう。

(4) Dさん

彼女は、Cさん同様にサークル内恋愛を一度も経験していないが、大学在学中に大学の外で1人の異性と交際経験がある。Cさんと同様にサークルに対する意識を中心にみていきたい。

Cさん同様、サークル内での恋愛にあまり関心がなければ、サークルに対する所属意識も低いのだろうか。Cさんの大学生活におけるサークル占有率を聞いてみた。

「サークルは全然行ってないし、サークル自体は低いかな。やっぱバイトめっちゃ入ってるし、バイトが一番で次恋愛でその次にサークル？ってか大学の友達かな。サークルは人数が多くて、学部はそれが人数少なくなった感じ。」

彼女は1回生のときはかなりサークルに参加していたが、1回生の夏合宿に参加せずそれがきっかけであまりサークルに参加しなくなった。そして新しくアルバイトを始め、それ以来アルバイト中心の生活が続いているようだ。学部の友人とサークルの友人は同じ、大学の友人の枠に入るといふ。では、大学の中とその他のコミュニティでは彼女にとってどういった意識の違いがあるのだろうか。

「何かでも、学校の中って輪っかって感じじゃない？何か友だちの輪って感じで、外でたら一対一の人間同士みたいな。繋がり方が。」「大学、大学って、何かあの番号わざわざ交換しなくても会うやん？必然的に。何か授業一緒やったりとかして「あーA君かっこいい」みたいな。感じやん？やし別に1対1の付き合いをしなくても別に会う機会はあるし、見る機会もあるし声を聞く機会もあれば・・・やけど何か、学校外のB君場合もC君の場合もD君とかの場合もなんか一つのイベントでみんなが集まる機会があったとしても二人で喋ってたら「お前ら～」ってなるねん。大学って二人で喋ってても友だちは友だちやん。けど、外、何か友だちの輪っかなんか、大学の中ってそういうイメージで、繋がり友だちみたいな。輪っかみたいな感じで、外はもう1対1みたいな。」

大学内で恋愛をする気がないわけではないと言っている。彼女の、大学の中の友人関係に対する言葉に注目したい。大学の外と比べると、輪っかの繋がりだという。彼女にとって、みんなで仲良く、という刺激のない平等な関係なのだろうか。こうした繋がりを持つ大学内の雰囲気では、1対1の付き合いになることが難しいようだ。

大学内に交際相手がいると、一緒に過ごせる時間も必然的に多くなる。そういった恋愛をしたくないのか、そういう恋愛をしている人をどう思うか尋ねてみた。

「したくないっていうか別にしたくないんとかじゃなくて、別にそういうところ(大学という輪っかの中)にそれ(恋愛)求めてない多分。」「だから(前の彼氏は)D J やってるから好きとかじゃなくて、何か知らんけどどこに惹かれてるんかわからんけどどっか惹かれてるポイントがあって、D君D君言ってるんやろし、だから大学の中でもなんしか惹かれるポイントがあるような人がいれば私は惹かれてるんやろし、でも別に一緒に居れるから大学ん中がいいとかそういうことは考えたことはない。一緒に居れへんから一緒に同じ話題が共有できるからアパレル(バイト関係)がいいとかそれも思ったことはないし。」「でもさ、大学で付き合う子とかもおるやん？それすごいよなあ～おるなあ～」

同じ所属グループに居るから親近感を覚え、恋愛に発展するというわけではないようだ。では大学での交際をすごいこと、と言っているが、彼女の理想の異性や以前交際していた恋人との共通点は何だったのだろうか。

「え、私ファーストインプレッションで決まるから。多分。雰囲気多分。」

「だからその雰囲気で話して合わへんひとは多分・・・雰囲気っていっても最初に・・・見ていいなと思って喋って10分15分喋ったら、あれ？(合わないな)とかなる人いるやん？だからそれはもう全然アウトやけど、あーでもD君の場合はほんまに一目惚れやな。」

「え、D君めっちゃ気遣いいやで。何か多分(自分と)似てんねやろな、今喋ってて思ったけど何かD君めっちゃ気遣いいやし前もって約束とかしいひんねんな。」

彼女と前の恋人は性格の中で似ている部分があった。彼女は自分の性格についてこう述べている。

「でもな私、元々人と一緒に居たいって思わない人なんやんか？何か、連絡がないとか連絡ずつととってる相手やったら連絡ないな～とかはあるけど、一緒に居たいってなかなか思わなくて。」「うーうん、好きな人とかでも。友だちでも。思わないから・・・別にもし(人と)普通に仲良くなったりして、じゃあご飯いこうや～とかなるやん？別にそれも面倒くさい、面倒くさいじゃないけど・・・ご飯行ってどうするん？みたいなの。何か、多分自分で壁作ってんねやと思う。」「私の場合な、基本的に前もって約束ってしないんやんか？いついつどこどこ行こうとかっていう約束。それは男でも女でもそうで、そのときのノリで生きていってるねん私。何か今日も今のとこ予定ないやん？で、夕方とか夜に(友達から)電話かかってきて、今日遊ぼうや～って言われたら、ああいいよ～って行くねん。誰に対してもそうやねん。」「自分から言うときもたまにあるけど。何してんの～？え、暇やねん。みたいなの。ほんじゃあ遊ぶ？みたいなのときもあるし、基本的に前もって約束とかもしないから、何やろ、そのときを楽しみにすることもないから、だからそこに依存が生まれへんのちゃう？」「約束は面倒くさいな～。何か私嫌やねん～日曜日3時に約束な～とか決まったら、その時間近づいてきたら、もう3時になるな！って思ってまう。誰に対しても。」「え、私は基本的に人に合わせるからそこは丸く収まっているけど、合わせて気分で動いてって、そういうノリでしてってしまっているから(人付き合いを)、向こう(友達)からしたら楽やん？使えるやん？私のことを。だからよく使われるねん私。友だちとかにも。それで(ストレス)溜まって、こいつと離れなアカンなって思ったりとかはめっちゃある。けど今までそういう生き方をしてきて、どうも変えられないみたいなの。」

友人だけでなく恋人に対してもあまり依存することがなく、それは自分がある程度壁を作っているからだDさんは話す。誰が相手であろうと、自分をあまり出すことがなく、必ず相手のペースに合わせて、希望に対してノーと言わない生き方を長年続けているという。作った自分のままで友人に接して、最終的には相手に疲れてしまい、その友人から離れたいたいという気持ちに駆られてしまうのならば、自分を出して人と接している友人ら同様に、Cさんも自分を出せばうまくいくのではないだろうか。そうすることで、自分自身が楽になるのではないだろうか。Cさんの人に対する接し方と同様に、若者の対人関係について述べてある興味深いものがある。

『友だち地獄』の著者、土井隆義は1980年代から始まったいじめを元に現代の若者について次のように述べている。昨今の少年たちは、日頃の人間関係にすら安心感を抱きづらくなっている。だから、仲間との関係が一時的にでも揺らぐことを極端に恐れてしまう。自分だけが浮いてしまうのではないかと不安におののいてしまう。その不安を打ち消すために、その場の空気をきちんと読んでノリを合わせ、仲間をシラけさせないようにいつも気を遣わざるをえない(土井 2008)。Dさんは、友人の前でありのままの自分を出し、衝突するくらいなら、自分を出さずに相手に合わせることで摩擦がないスムーズな関係を作り上げている。

友達との衝突を避けるために若者たちが多用するテクニックの一つは、いわゆる「ぼかし表現」だろう。「とりあえず食事する?」「ワタシ的にはこれに決めた、みたいな」といった断定表現を避ける表現や、「あ、そうなんだあ」といった半独言・半クエスションと呼ばれる表現がそれである。彼らは、これらの表現を駆使することで自らの発言をぼかし、相手との微妙な距離感を保とうとする(土井 2008)。

こうした、対立の回避を最優先する若者たちの関係を、土井は「優しい関係」と呼んでいる。彼は「優しい関係」についてこう述べている。それは、精神科医の大平健が指摘するように、他人と積極的に関わることで相手を傷つけてしまうかもしれないことを危惧する今風の「優しさ」の表れだからである(『やさしさの精神病理』岩波新書、1995年)。それはまた、他人と積極的に関わることで自分が傷つけられてしまうかもしれないことを危惧する「優しさ」の表れでもある。いずれにせよ、かつての若者たちにとっては、他人と積極的に関わることこそが「優しさ」の表現だったとすれば、今日の「優しさ」の意味は、その向きが反転している(土井 2008)。

Dさんの友人に対する態度はこの「優しい関係」と同様、人との距離をとるためのものなのだろうか。彼女はまた、大学の友人についてこうも述べている。

「大学生の友だちって逆にDさんすごい、っていうスタンスやねん私を見る目が。だからサークルとか行っても年下の後輩とかと喋ってたりしても、えっアパレルやってるんですかすごいですね、っていう、どっちかっていうと私が上に見られがちっていうか。外に出たら私なんか上に見られへんし、同じ仕事場(バイト先)で話したら(自分は)2年以上いるし先輩やし上に見られるけど、そんなん外(世間)出たら全然ちゃうわけやん?だから私(人か

ら)上に見られるの苦手やねん。後輩の世話嫌いやし。面倒くさい。」

大学生である彼女にとって、もはや大学よりもアルバイト先での考え方やものの見方が彼女のアイデンティティを形成する要素になっている。その結果、サークルでの自分の見られ方にあまり好印象を持たず、自分とは考え方が違う人たちの集まりとして、無理して作り上げた自分で接してしまっている。相手との距離を保つことで

では、あまり参加することもなくなったようだがサークル内・外それぞれの異性の魅力について聞いてみた。

「へっ！？！？恋愛的ないいな～はないやろ。ないってか、F君いい奴やな～G君おもしろい奴やったんや～H君何か気遣いいなんかな～なんちゃら誰々～ってそらあるで一個一個。いろんな、この人はどうで～とかそんなんあるけど、何かでも全然付き合いたい・・・とかはないな。あ、でも、興味ないっていうかサークルの中で今更女の子らしくできひんよな。あ、私それあるわ。」「でも、ただ男の人見すぎたんちゃう？(大学)外の。やっぱりさあ仕事もしてはるしな～あか抜けてるところはあか抜けてるし考え方もそら大学生と違うかったりはするんやろうし、まあ考え方までそんな深い話をしてるわけじゃないけどみんながみんなと。けど何か・・・何か(惹かれるようなところ)持っているんやろなって。」

サークルの中ではもう自分のキャラが出来上がってしまっているのに、今更相手のことも恋愛対象として意識できなくなってしまっている点は、先に述べたCさんと同じようだ。自分のアイデンティティを確立できる場ではない大学を、1対1で深い関係になれない場と考えており、自分をセーブし周りに合わせてしまっている。大学以外の場では人と人との関係としてコミュニケーションをとりやすいため、出会う異性とも1対1の関係を築けるので特に魅力を感じると考えられる。彼女の場合、ファーストインプレッションという感覚の類似という点で恋に落ちるが、その根底には自己のアイデンティティを確立できる場である要素が必要なようだ。

(5) E君

この中では男性1人だが、E君は大学在学中に3人の異性と交際経験がある。一人目は高

校の同級生で、高校大学にまたがって交際を続けたようだ。二人目は同じサークルで同学年の友人だ。三人目は同じアルバイト先だ。サークル内での交際期間は約 2 年である。彼の中のサークル占有率はこの 5 人の中で群を抜いて高い。その点に注目してみていきたい。まず、彼にとっての大学生活とは、サークルとはを聞いてみた。

「やっぱ大学生活振り返ったら、いやもうサークルしかない。ほんまに。サークル以外・・・ゼミもそんなあれやし、サークルやな、全てやな。」「そやなあ、サークルの子といたら楽しいからってのはある。まあ先輩とかも楽しかったしなあ。それが大きいかな。まあサークルさまさまや俺は。」「そやなあ、1 回の初めから結構参加してたよ俺は。別に飲み会だけとかに限らず活動もいったし、新歓合宿・・・新歓コンパ(初めの頃のサークル活動)から行ったな。で、(普段の平日の)活動も結構行ってたな。うん。」

彼の中で大学生活はサークルが全てだ。彼は商学部に所属し、高校からの同級生も少ないという。学部が大きすぎると固定の友人を作りにくいのはよく聞く話だ。まして高校からの知り合いがいなければ、大学に入ってまずは友達作りが鍵を握っていただろう。そんな彼にとってサークルで出会った仲間は大学生活を物語るものになり、参加率も自然と上がっていったのだ。サークルに入った目的を聞いた。

「やっぱ友達作るってのが大きかったなあ、だって・・・サークル入ってないと絶望的やもん、今考えたら。どうしようって思うもん。」「俺もほんまにサークルは、ほんまに入り損ねてんどこも。だからどうしようと思って。でどこもパッとせんなあと思って。で、K って覚えてる？あいつと俺高校一緒やねん。で、お前どうすんの？つって、ジード今日説明会やで、総会があるって言って、それきてみたら～？みたいになって俺も一緒に行ってんやん。じゃあそこでもう入会の話やって、俺知らんくて、まあいっか～3000 円やしもう入会したれと思って、で入会した。」

偶然に偶然が重なったようだ。彼の大学生活のアイデンティティ形成の場はサークルになるだろう。では彼にとって異性との出会いとはどのようなものなのだろう。次の言葉に注目したい。

「そやなあ、付き合うのはそら近くないと。」「多分友達の延長で付き合うのが多い。かもしれん。だからあんまり紹介とかで付き合ったことない。ほんま改めて出会いみたいな感じではない。気になり始めたらもう(相手に)ちょっかいかけるタイプやし。」

大学に入る前から彼の恋愛スタイルは自分の所属する身近なコミュニティ内で、友達の延長で交際するという形だ。谷本の言う〈友達感覚の共有〉にあてはまる。近くで交際すると、周囲の目は気にならないのだろうか。

「あんまり気にしないね。」「あー難しいな。まあ(友達から)いじられたりするの、そんなに嫌でもないし。まあ好きならいいんじゃない。」「う〜ん。こっちがめっちゃイチャイチャしたりはせえへんけど、まあそうやって冷やかされる分には全然。最初は嫌やってん。付き合いだては言われたらやっぱ恥ずかしいし、嫌やけど、もうそれで逆におもしろいほうに持ってった方が、まあ。楽やろ？いつまでも照れてたら、またその話なったら萎縮しちゃうやん？そやったらもう逆に聞かれた以上のことを言ったほうが盛り上がるやん？盛り上がるっていうかその場が。」

自分自身が交際することに対しては全くとっていいほど特に気にしていないようだ。サークルという友人との場と、その中に彼女もいるということを混同させずうまくやっている点は先に述べたAさんと同じだ。

「G(E君の友人)とKさん(G君の恋人)が付き合ってたKさんとあんまとか話さん・・・どっかであったんかなあ？それは人によるかもしれん。全然GとKさん、俺Kさんやったらははなせるけど・・・」「そやなあでも男ってあんまそんなん(やきもちとか)ないと思う。男が嫉妬するってそんないから、女の子のほうがあるかもしれん、そういうのは。」

逆にサークル内恋愛をしている他のカップルについて、Aさんのように気を遣うか聞いてみた。男女で意識の違いがあるのか、E君はカップルに対して特に気を遣わないようだ。友達に気を遣うことがない分、自分も気兼ねなくサークル内で恋愛が出来たのだろう。

「元々まあサークル一緒やったら仲良くなるわなあ。でまあ普通に誰と変わりなく仲良か

ったんやけど、まあ・・・いつ何でやろなあ？まあ何か好きになったんやろなあ。たぶん俺から好きになった。」「何かよくその子とその(異性の)友達と、男友達とみんなで遊んでるうちに、仲良くなったというよりも、ちょっと惹かれてったなあ。んで、まあメールして、まあ二人で遊んでって感じ。」「まあそら授業でも(前の彼女と)会うからなあ、それは大きかったで。まあ商学部結構おったからな。しかも1回ん時はみんな結構授業受けるやん？だから顔合わす機会が多くなったから。」

1 回生のときは他の学年に比べて比較的授業が多く、学部が同じだと顔を合わせる機会もかなり多いだろう。学部の人が多いということで、サークルの友人と授業で出会ったときの感動は大きい。授業が終わる夕方からサークル活動が始まるので、学部の授業を受け、その足でサークル活動に参加するとほぼ一日中行動を共にすることになる。同じ時間を共有し、その中で相手の魅力に惹かれていったようだ。しかし彼は別れの原因についてこう語っている。

「向こう(別れた彼女)に原因があるんやろうなあ。結構だからな～二人で話しててもっと盛り上がる話やのに(盛り上がらない)って思うことが多かった。もっと盛り上がる話、もっと絶対違う人と話したら盛り上がる話で。」

E君がサークル内で交際していた彼女は、私にとっては友人である。彼女は私たち友人の中でのときはE君の言うように盛り上がり欠けるような子には感じられない。そのことを彼に言ってみた。

「それはさー多分みんなでおるからやと思うねん。二人やったらしんどいで？だから誰かと誰かかけあってその場でスパイス的な感じでふったら、突っ込んだりできるけど、こういう(二人だけの会話での普通の)トーンやとこうガンガン(話して)いってもこれ(反応)がないから、結構きついよ。」「別れたのはそれも大きかったなあ。」

交際前は同じグループに所属し、親近感もある中惹かれていた相手だが、実際交際してみると性格やノリの感覚は違ったようだ。では、現在のE君にとってどういう異性が理想のタイプなのだろうか。また、現在交際している彼女についても話してくれた。

「いや俺はほんま内助の功みたい。ほんま(自分を)たててくれて、で結構身の回りも、結局俺が手玉に取られてるみたいな。でもそういう素振りはみせへんとちゃんとたててくれる。結局一番わかってくれてるのはその女の子。っていう嫁がほしいな。」「そら(異性の家庭的な部分は自分の中で)大きい。やっぱり。やっぱ年重ねるごとにそこは大きくなる。いくらきれいでも家汚かったら意味ないやろ。ほんまにな、いくらきれいな人でもほんま、例えば藤原紀香でも付き合っ半年で飽きるわ絶対。誰でも。」「女兄弟やからか、女の人を結構いい面でも悪い面でも見てきてるから、姉ちゃんとか。ああ、これはないとか、俺姉ちゃんは絶対嫌や思ってる。」

「そやなあ、(今の彼女は自分を)ほめてくれるな、いろいろ。俺ほめて伸びるタイプやから。ほんま、やっぱ男はほめて伸ばしたほうがいいと思う。結構な、プライド高いからな男。プライド高いっていうかその一あんまり、褒められるってないやん？女の子やったらかわいいなあ〜とか友達同士であるけど、男でお前めっちゃかっこええなあとかそんな絶対ないやん？」

E君の言葉からもジェンダー意識は高めだ。伝統的性役割を相手に求めているという点は、AさんやCさんと同じだ。彼にとってアイデンティティを形成する場はサークルであり、交際相手とは感覚の類似も大切なようだが、ジェンダー意識も高いので異性には女らしさや自分ではまかないきれない部分のフォローを求めるようだ。そこには家庭内からの影響も大きくあるようだ。

5. 考察

5人のインタビューをもとに、分析をしたが、第一に恋愛はアイデンティティを保証する契機だということはこの分析からもわかるだろう。Bさん、E君はサークル内で恋愛をし、サークルこそがアイデンティティも形成する場だったといえる。Dさんはサークルや大学という場では自分を抑えてしまいがちだ。アルバイト先に占有率が高いため、そこでアイデンティティを形成し、そこからの繋がりでの恋愛をしている。Aさん、Cさんはサークルも含めて自分の所属するグループに深いこだわりがなく、大学に来るまでの過程で形成された

アイデンティティを持ちながら恋愛をしている。

また、感覚の類似という点では、AさんBさんDさんは友達関係の中で、互いの性格が似ている点に惹かれたという。互いの〈ノリ〉が似ているのだろう。しかしBさんは現在交際している相手との相違点のほうがかなり目につくという。これは先に述べたとおり、その差異から多くのことを学び、コミュニケーションをとる困難を知ること、他人に対する気遣いを覚えたのだ。E君の場合、同じコミュニティの中、大人数で恋人と感覚の共有はできていたが、感覚にも、性格、ノリ、友達感覚などさまざまなものがある。1対1になると少し違ったようだ。

ジェンダーロールについては、5人全員が伝統的役割に沿ったものを望んでいる。特にAさんはサークル内での異性の態度を見て、E君は家庭内での兄弟の様子と比較して、反面教師とまではいかないが、その影響が大きい。

6. おわりに

三つの要因を基に仮説を立て、サークル内・外での交際要因を分析したが、今回アイデンティティとの関連性、感覚の類似、という点が大きな鍵を握っていた。自分の所属するコミュニティの中でも、占有率が高いものに影響され、その中での異性に惹かれる。そこでアイデンティティが形成されるため、サークルに重点を置いて活動している人やサークル内の友人と密な関係がある人ほど、サークル内での恋愛をするといえる。そしてやはりサークル内恋愛をしない人ほど、自分の中のサークル占有率が低かった。この研究とは直接的な関係性はないが、こうしたアイデンティティの形成には、土井(2008)の述べる「優しい関係」が作用している。

それと共に、その異性とのノリ、雰囲気、趣味、友達感覚など感覚の類似性が交際のきっかけとなることがわかった。感覚の類似においては、感覚という幅が広すぎるが、サークル内では性格やノリ感覚が多いただろう。Dさんが言うように、「共通の時間を共有できることが異性を好きになるポイントではない」ということはこのことに関係し、共通の感覚を持つことやアイデンティティ形成の一部になるということは無意識的に異性に好意を持つポイントになるだろう。しかし友人関係の期間が長くなるにつれて、そういった感覚の類似点を持

っている異性でも友人としか見えなくなることが多いので、この点については例外だ。ジェンダーロールについては男性、女性ともに伝統的性役割の要素を持つ異性を理想の相手としながらも、感覚の類似を求めるという五人とも同じ結果だったので、特にサークル内・外での交際要因には関係しないようだ。

ふとした疑問から研究テーマにした、サークル内恋愛だが、おもしろい結果になったと思う。サークル内で交際することによって、周囲の人に気遣いさせないということは重要だと感じたし、の研究を機に、恋愛と友人同士のコミュニケーションとの関係も見出せた。友人に対してここまで突き詰めて話を聞いたのは初めてだったが、普段は恋愛話をしない友人も恥ずかしながらも答えてくれた。最後になったが、インタビューを受けてくれた友人や指導して下さった先生、T Aさんに感謝したいと思う。

(22,979文字 40字×30行 32ページ 原稿用紙58枚)

参考文献

- 谷本菜穂, 2008, 『恋愛の社会学—「遊び」とロマンティック・ラブの変容』, 青弓社
土井隆義, 2008, 『友だち地獄—「空気を読む」世代のサバイバル』, 筑摩書房